

その日は牛の当番。急いで自宅に帰った時に爆風が。

昭和20年、私は13歳でした。初めて空襲があった3月18日の朝は寒く霜が降りていました。飛び起きると飛行機が空中戦をやっていました。日本は勝つものだと教えられていましたが、空中戦の途中で火が付いて落ちた飛行機は、日本の零戦でした。

4月8日の日曜日、田崎国民学校が空襲にあった日のことをよく覚えています。その日は曇りで暖かい日でした。

私は高等科2年（現在の中学2年生）でした。同級生は92人で、全校生徒は700人から800人いたと思います。前日の4月7日が入学式でした。

その頃学校では、うさぎ・豚・やぎ・にわとり・牛を飼っていました。最上級生だった私たちは牛の当番でした。

朝8時過ぎに学校に行き、同級生の中村君と一緒に、学校東側の実習田へ、牛を引いて運動させに行きました。そこはレンゲ草が繁茂してい

たので、牛に草を食べさせました。もう1人の同級生の牧野君が来なかったため、家に呼びに行こうということで、大正橋の近くの桜の木に牛をつなぎ、その同級生のいる集落まで向かった時です。空襲警報のサイレンが鳴りました。

私たちは、慌てて牛を走らせて引き返し、学校の正門にたどり着きました。その時、鍵をもって奉安殿に行かれる途中の大石先生に会いました。「牛を早く牛舎に入れて、奉安殿の横の防空壕に入らないか」と言われ

ましたが、牛を牛舎につなぎ、私たちはそれぞれの家に帰りました。私の家は学校から100mの場所にありました。帰る途中、私の叔父・末盛が警防団服を着て鐘を叩きに警防団詰所へ走って行く後ろ姿を見かけま

した。それが叔父を見た最後の姿となりました。家に帰ると、姉2人が洗髪などをするために釜でお湯を沸か

したので、私たち4人は慌てて学校を出ました。学校の近くには急坂があり、坂の上には鉄道が通っていました。その坂を上りかけた時です。ドーンという音がして、上から何か降ってきました。私たちはビックリして左に杉山があったので山の中に駆け込みました。そこは集落の人たちが避難して

生きた心地がせず、無我夢中で下堀の家まで走りました。

戦争が始まった昭和16年から1、2年は勝ち戦が続いていま

した。嬉しかったのはシンガポールが陥落した時。ゴムの産地ということもあり、女子生徒だけにゴムまりの配給があったからです。しかし戦況が悪くなると、学校に弁当を持ってこれなくなり、学校の校庭に植えた芋の代用食だけになるなど、学校生活も厳しくなりました。

昭和20年4月、私は田崎国民学校の高等科1年（現在の中学1年生）でした。4月8日は、下堀の生徒に週番がまわってきた日でした。学校に行つて、職員室を掃除し各教室を見回り、花を飾りました。学校に水道がなかったため、近くの池の水を汲むのも週番の仕事でした。

水汲みから帰り着いた時、職員室で出勤していた大石先生と中村先生に会いました。「あなたたちはまだいたんですか。空襲警報が出ているので早く帰らなさい」と大石先生から言われ

しているところでした。これは危ないと思い、慌てて水をかけようとした途端、ドドンという大音響と爆風で、一瞬にして真っ暗闇になりました。何秒か何分経ったかわかりませんが、気がついた私は釜小屋の戸袋に吹き飛ばされていました。自宅と牛小屋はすべて吹き飛び散乱している状態でした。

幸いにして私は怪我がなく無事でしたが、「助けてくれ」という姉の悲鳴を聞き竹山に行くのと、爆弾の破片で背中を負傷していたので、着物で止血し防空壕へ連れて行きました。

爆弾は、学校とその周辺にくつも落とされていました。大石先生は御真影を抱いたまま校長住宅下の防空壕で、中村先生は小使室と職員室の渡り廊下で亡くなったそうです。学校の奉安殿も、爆弾の直撃を受けていました。もし、横の防空壕に入っていたら死んでいたと思うと、ぞつとします。

避難警鐘を打ち鳴らしていた叔父は、警鐘台から降りる途中に爆弾の破片で左足を負傷し、出血多量で死にました。当時の永田市長が現場に見舞いに来られ、「やられたかよ！しもたなあ」と言われたことを覚えて

の校舎は残っていましたが、西の校舎は倒れていました。奉安殿も爆弾で見る影もなく吹き飛んでいました。火災は起きていませんでした。学校にいた先生たちがどうなられたか気にはなりましたが、自分のことで精一杯で、学校を後にして走りだしました。

もしあの時杉山に入らなければ、たぶん命はなかったでしょう。なぜなら、直前まで前を歩いてきた男の人が、首が無い状態で亡くなっていたのを見たからです。私たちは怖くて何がなしかできませんでした。

永野田に通じる松林の県道に差し掛かった時です。近くの山の上から飛行機が3機、音をたてて飛んできました。米軍機が引き返してきたと思うと生きた心地がしませんでした。道路脇の茶畑に隠れてのぞくと、飛行機に日の丸が見えました。今のうちに帰り着かねばと、1里以上もある畑の中の道を懸命に走りました。

なんとか家に帰り着くと、親の顔を見るなり、思い切り泣き出したことを覚えています。家には近所の人たちが集まっていた。私の顔は爆風ではれて



ほやま むつお
穂山 睦男 さん

昭和7年生まれ（86歳）。川西町在住。自身の戦争体験談を伝える活動も行う。

それから終戦を迎えるまで、家を失った私たちは防空壕での生活を送りました。今の年齢まで生きられた私は、運が良かったのだと思います。戦争は絶対に起こしてはいけません。平和であることが何よりも大切なことです。

いたそうです。大石先生と中村先生が亡くなったことは、あとで聞きました。自分の命よりも奉安殿の御真影のほうが大事だった時代でした。2人の先生方の生前の最後の姿・様子が今でも忘れられません。戦争がいかに怖いものか、子ども心に感じた当時の記憶は、私の心から消えることはありません。



おまがり
尾曲 ヨシ子 さん

（旧姓：蔵ヶ崎）

昭和8年生まれ（85歳）。下堀町出身。20歳で結婚し、現在は王子町に在住。